

空



2009年

**SORA** 26号

箱 庭 (26) | 1 柴田 佐知子

大波のうしろに春の来てゐたり

鶯や陶土の山は縮むばかり

窓に来て大きくなりし春の雪

陽炎や食みては歪む牛の貌

杖に笠重ねて遍路眠りけり

—「はあごうと」四月号より—

雛流る目鼻賜ることもなく

眠さうにつながる畦や仏生会

巡礼を山は桜となりて待つ

祈り

高倉和子

篠栗 十句

雨乞ひに始まる霊地花曇り

黙礼の頭の黒々と花の冷え

寶錢の鈍き光や春の鯉

地獄への入口ほのと花の寺

さくらさくらゆつくりとバス曲りけり

接待のまだあたたかき蓬餅



岩窪に震へとどまる落花かな

雪柳地蔵の顔にかかりけり

祈る背のけぶりてゐたるさくらかな

分け入りてまた新しき緑さす

盛り上がる土の匂ひや麦の秋

筍の塚傾けて出てきたり

頭より飛び込んでくる夏燕

噴水の止まる高さのいつも同じ

鎌持ちて父が入りゆく夏の山

春になると思い出す光景がある。あれは小学校の一、二年生の頃だったと思う。近所の上級生で仲の良い女の子と三人で朝学校へ向かっていた時のこと。その日はとても天気がよくいつもの田んぼが広がる道を歌いながら歩いてきた。あんまり楽しくて、そのうち小川にかかる橋の上に座り込んで泳いでいる目高を覗いたり花飾りを作ったりしている内に時間を忘れてしまっていた。気付いた時には学校が始まっており、今さら学校に行く勇氣もなくとぼとぼと元来た道を泣きながら帰って行った。

帰り着くと家には学校から連絡が来ていて、すぐに車に乗せられ学校に連れて行かれたのだが、先生に叱られた記憶は無い。その日の道草は少しほろ苦く、とても懐かしい思い出である。

## 花の丘

中田みなみ

放たれて犬が雲追ふ春野かな

三月や金絲の太き守り札

若人の敬語正せり招魂祭

靖国へ一閃の礼初つばめ

つばめ来て客足増ゆる種物屋

ちんどん屋身をくねらせて春連れて



私達の句会が生れてから丁度四十年経った。それは当時難聴者と主にストマイ失聴者とボランテニアの混成で始った。第一回目の句会で特選に頂いたのは、へ井戸端の芥子に踞みて歯を磨くで、この記憶から多分五月頃であつたらう。作者のHさんはその頃郊外の職業訓練所に入所したばかりで、説明に拠ると毎朝洗面所が混むので井戸端で歯を磨いているといつしか芥子の花が咲いていた…ということだった。如何にも彼女の環境が目に見える秀句だと思つた。

さて句会名を決めるということとなり、何かの話題に、てんとう虫には五つ星と

咳のこだましてゐる蘭の温室

芝居小屋裏に運河や春の月

秩父路に杖の鈴鳴るすみれ草

通されし一間春の蚊鳴きみたり

遠足子つぎつぎ井戸を覗きけり

花の丘一組づつの恋散らし

クローバー傷ついてゐる二人分

筍を掘るまづまづの骨密度

擬似卵ご生大事に日永鶏

七つ星があり、どちらかが害虫だと言うので、それなら佳句あり駄句ありで「တွေとう虫句会」がぴったりだと意見が一致した。

句会は「かるた式」に決った。失聴者の間にポランテアが坐り、大きめの短冊にサインペンで句を書き、畳に並べる。ポランテアがそれを読み上げ、誰の句？とそれを掲げると作者は頷く。次に選んだ人を指差して再び畳に置く。かるた会ならだんだん枚数が減るのだが、この句会では最後まで全部並んでいるわけで、終了すると一回顔を見合わせぐったり疲れが出たが、愉しく喜んで頂けたし、私自身その都度更に学び、精進しなければという思いに駆られるのだった。当時句友達は四十四歳の私と同年代か、又は年長者が多かったので、長年の間には歩行困難になられたり、天国に先立ってしまった。やがて健聴者のみに膨れ現在に至っている。

省みるとその頃の私はまだまだ未熟な選評をしていたであろうから、あの大胆さが今更に面映いばかりである。

伴奏譜

荒井千佐代

高い高いすれば嬰は反る冬木の芽

浅春の屋根に乗せある砂袋

茶の花や安息日には灘を見て

如月の葬へ分厚き伴奏譜

牡丹雪語るは死者のことばかり

麦踏みに灘あり島あり空のあり





鳥の混む平らな礁二月尽

原爆の語りべ手炉に手を翳し

風光る首に巻きたる草木染

ちち恋へばちちが降らせむ春の雪

雛まつり日矢は海中貫きて

廢船の木目浮き立つ涅槃西風

蛸の子にけふも夕映え春休み

春昼のしんと心臓外科病棟

たつぷりとバシルバジリコ春深む

先日、福岡の西鉄グランドホテルで開催された伊藤通明先生の俳人協会受賞パーティーに出席させて戴いた。生憎の雨であつたが、会場には「白桃」の皆様の喜びや元気が満ち溢れていた。沈んでいる私にとっては、本当に有り難い機会を授かつたと感謝している。

通明先生にお声をかけて戴いたとき私は「私が『俳句朝日新人賞』を取れたのも先生のお蔭です。俳句朝日新人賞の生月・平戸吟行の折、先生が『人が一句作る時、あなたは三十句も五十句もつくないといけない。ここで三十句詠みなさい』とおっしゃって下さいました。そのお言葉を励みに五十句作りましたから」と申しあげた。又「連続で角川賞受賞、俳人協会賞受賞と、白桃はスゴイ！」と言うと、「僕は何も言わんのだけど、皆が自分でやっとする」とおっしゃった。そんな通明先生の一番弟子の柴田主宰と一緒に勉強させて戴いている私。果報者である、心からそう思う。

夢かとおもふ

服部 早苗

指たてて眠れる赤子春きざす

猫の恋敗者復活戦なども

思ひ出す人の句の佳しオキザリス

人や知る草摘む丘は窯跡と

水際けむらす乗込みの飛鳥川

春の野の空にちちははゐてひかる



堇咲く子に一センチ大き靴

頼りなき飛行機雲や小鳥引く

髪止めの蝶やいちごや雛祭

犬笛もひひなも古ぶひとひかな

たゆたふて一夜を海へ花筏

転生の映像かともクリオネは

往きしこと夢かとおもふ月日貝

一ねん一くみ全員の芽のチューリップ

桜蔭降るフェルトの園児帽

今、苺の苗を六株育てている。毎の大好きな二人の孫のために。

苺は日毎に葉を大きくし、白い花を咲かせた。適当な筆がないので綿棒でこちょこちょと受粉していると蜜蜂がさかんに花と花を行き来している。頼もしい味方だ。

実は、子供の情操教育に役立つのではと、鉢に植え、それぞれの孫（親）に渡そうという計画だったが、お母さんの方で育てて実が生ったら頂戴ねという現実的な返事。子育て真っ最中の娘や息子には苗を育てる余裕の時間は無いかもしれない。そういえば苺という字には母という字がついていた。

花は一センチほどの実になった。まだ緑色だ。水をやり肥料をやり、結構世話を楽しんでいる。そして実が熟すのを最も楽しみにしているのは鳥たちだろう。

「服部さんちの苺」と。